ゼルダの伝説～真実の瞳～

はいから

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カカリコ村に住むシーカー族の青年、レオンは、イーガ団の両親の元に生まれた子だった。

彼は真実（まこと）を廻って、今日も暗躍する。

目次

プロローグ ―― 1
第一章　覚醒の兆し
塔の覚醒 ―― 4
一族の歴史 ―― 15

プロローグ

「はぁ‥‥ っ！はぁ‥‥ っ！」

真夜中のクロチェリー平原を駆ける二つの影。

イーガ団の組員であるその男は、ここ数分間続く追いかけっこに大きく息を切らせながら、後ろから迫るある男から逃げていた。

事の発端は数刻前。

カカリコ村への偵察の帰りがけ、尾行に気付いたイーガ団のその男は、いつもの如く逃亡を試みた。しかし、この現状を見れば逃げきれていないのは明らかで。幾度となく逃亡を試みても、その尾行してきた男を、未だに振り切れる様子がないのだ。

いや、それどころか。

まるで永遠に続くともとれるほど続くこの追いかけっこは、もはやどこかに誘い込まれているようでもあった。

逃亡を図るこの男の本拠地である、イーガ団のアジトまで尾けてくるつもりか。

それに気づいたイーガ団の男は、後ろから迫る男を向かい打つべく、首狩り刀を構え、後ろを振り返った。

「……！」

イーガ団の臨戦態勢に気付いた尾行男も立ち止まり、手に持っていた大きな太刀を構える。

ここでイーガ団の男は、一つ、あることに気付いた。

「（〝瞳〟と〝涙〟……。あの紋様は……！）」

月明かりに照らされ、尾行男の顔が白日の下に晒されたその時。

月光により露になったその顔には、シーカー族の紋様が描かれていた。

「……っ！」

その紋様を見て、イーガ団の男は、より一層警戒したように首狩り刀を構える。

月光に照らされ、煌びやかに輝く白髪。透き通るような白い肌に、瞳に涙が零れたようなシーカー族の紋様。

そしてその赤い瞳は、イーガ団の男を貫かんとばかりに鋭く光っていた。

「な、何が目的だ？」

その鋭い視線に気圧されながらも、イーガ団の男は威勢よく問う。

そんなイーガ団の様子を見たシーカー族の男は、呆れたようにため息を吐いた。

「それ、こっちのセリフでしょ……」

面倒くさそうにそう呟いた後、腰の残心の太刀に手を掛け、低く構える。

「『勝って兜のなんとやら』」

「……　え？」

突拍子のないことを言い出したシーカー族の男を相手に、イーガ団の男は呆気にとられたように立ち尽くす。

さっきまで確実に目の前に対峙して、対面して、その姿を捉えていたはずであるのに。いつの間にシーカー族のその男は、イーガ団の男の背後を取っていた。

鞘に納められていた残心の太刀の刀身は、いつの間にかその身を露にしていて、刀が発する銀色の光が、やけにイーガ団の男の目に映った。

「うちの婆さんの口癖だ。隠密活動をするなら、まず気付かれないこったな」

シーカー族の男は、静かに、ゆっくりと、その刀を鞘に納めた。

『抜刀』

第一章　覚醒の兆し

塔の覚醒

焦燥感。

シーカー族の青年、レオンの胸には、言いようのない焦燥や不安が募っていた。

眼前に広がるのは深夜のクロチェリー平原。明かり一つないこの平原では、夜空と大地の境界すらあやふやで、はっきりと認識できない。

「……」

なにも、今日だけ特別に焦燥を感じているわけではなかった。

こうやって、イーガ団の組員を始末した後には、いつもレオンは激しい不安や焦燥に駆られた。

さっきまで、残心の太刀を握りしめていた掌を見つめる。

あのイーガ団の男を切った感覚が、未だにその手には残っている。

もしかしたら、あれが両親だったのかもしれない。

イーガ団の両親を持つレオンにとって、イーガ団と対峙した後には、必ずそんな思い

がレオンの胸を突いた。
「(……　帰るか)」
言いようのない不安を胸に、レオンは、ゆっくりとカカリコ村に向かって歩き出す。
暗闇が辺りを包むこの平原の中で、遠くは西の方向で、双子馬宿の優しい光が見えた。
日中はあの馬宿のおかげで旅人や行商、野生馬で賑わうこのクロチェリー平原も、深夜にはそよ風の音一つが大きく聞こえるほど、しんと静まり返っている。
辺りに響くのはレオンの足音だけで、時折馬やボコブリンの寝息が聞こえるほかは、一切の静寂に包まれていた。
足音と共に、レオンの長い前髪が揺れる。
月光に照らされ、煌めくように輝くその白髪は、この暗闇の平原の中でも、ひときわ目立っている。
レオンはそんな前髪を撫でつつ、そろそろパーヤに切ってもらうか、と考えながら、その足をカカリコ橋に踏み入れた。
レオンの足音のほかに、川のせせらぎが辺りに響く。
結局、あのイーガ団をアジトまで尾行するつもりが、始末してしまったな。と、そんなことを考えながら、ぼうっと橋を歩く。
さらさらと流れる川のせせらぎが、レオンの耳にはやけに大きく聞こえた。

それと同時に、何処からか、こんな声も聞こえてきた。

『まことのメガネは、イーガ団のアジトの最奥に祀られているらしい』

「……!?」

突如どこからともなく聞こえてきたその声に、レオンは腰の残心の太刀に手を掛け、辺りを警戒する。

今の今まで、人や魔物の気配は全く感じなかった。そのはずであるのに聞こえてきたその声に、レオンは並みならぬ不気味さを感じた。

「(どこだ……？)」

臨戦態勢のまま、辺りを見回す。

されどいくら見回したところで、辺りに人影は見つからない。

それどころか、魔物の影一つすらない。

「……」

レオンは、より警戒を高める。

聞こえてきた声の方向を辿るように、目線を向ける。

それはカカリコ橋を渡り終えた向こう側で、暗くて見えにくいが、川岸の方から聞こえてきた。

暗闇の先を、目を凝らすように睨みつける。

ぼやっと浮かぶ橋向こう。川岸の岩々に囲まれ、一つだけ、異様な形をした石がそこに立っているのが見えた。

丸みを帯びた石。辺りの岩とは違う、確実に人工物であろうその石には、なにやら模様が刻まれている様子だが、ここからでは暗くてよく見えない。

石が喋るなんてこと、あるのだろうか。

この世に生を受けて十数年。レオンの人生の中で喋る石なるものは見たことがない。

しかしその声は確実にその石から聞こえてきた。

レオンは、訝しむようにその石を見つめながら、石に刻まれている模様を確認すべく、ゆっくりと近づく。

一歩、一歩と、カカリコ橋を踏みしめて、石に近づく。

そしてその石との距離が十メートルもないというほどの距離になって、ようやくその

模様が、レオンの目に映った。そこには……
「これは……」
〝瞳〟と〝涙〟。
シーカー族の紋様が、刻まれていた。

――その瞬間

けたたましい轟音が、辺りに響く。
レオンがちょうどその石の紋様を確認したと同時に、どこからかそんな衝撃音が鳴り響いてきた。
地面が唸るように揺れ、ただ事ではない轟音が辺りを包む。
眠っていた動物や魔物たちは目覚め、混乱の限りを尽くす。
地震。だとしたらこの轟音は説明がつかない。

混乱する大地を見回すレオンの目に飛び込んで来たもの、それは

「なにが・・・・ どうなってんだ?」

大地から、次々と塔がせりあがってきている様子だった。

＊

大地の割れる音。
大地の揺れる音。
それらは轟音となって、レオンの耳を激しく突いた。
このクロチェリー平原から目視できる数だけでも二本。一体どれだけの数の塔が、このハイラルの大地に出現したというのか。

この揺れと音から察するに、2，3本どころではないだろう。
「……」
茫然と遠くにそびえたつ塔を眺めているレオンに、夜の冷たい風が容赦なく叩きつける。
淡くオレンジ色に発光するその塔は、深夜のハイラルの大地の中では、異常なほど目立っていた。そして、遠くから見てもわかるその大きすぎる塔の存在感は、もはや不気味でもある。
夜の静寂が、再びレオンを襲う。
塔が立ってしまえばもう静かなもので。
さっきまであった轟音と揺れは、まるで嘘かのように辺りは静けさに包まれた。
「……　驚いている暇はない、か」
茫然と塔を見上げていたレオンは、頭を振るって目を覚ます。
彼は、後ろを振り返り、カカリコ橋の向こうを見やる。
「(1，2，3……　5匹はいるか)」
クロチェリー平原から流れるようにこちらに走ってきている、複数体の魔物の影。
恐らくさっきの揺れと轟音で目を覚まし、突然の衝撃で混乱しているのだろう。正気ではない様子で、こちらに向かって走ってきている。

「……」

レオンは、腰の残心の太刀に手を掛け、体制を低く構える。

魔物たちを見やると、揃いも揃って馬鹿正直にまっすぐ突っ込んできている様子だ。

好都合。

好んで片刃の太刀を使うレオンにとって、戦闘中自分からアグレッシブに動くのは出来るだけ避けたい。そうなると最もレオンにあった戦闘スタイル。その最適解は……

「はぁ……　っ！」

居合切りによるカウンター。

「グゲェ!?」

太刀による居合とは思えないほどの速度で、鞘から放たれたその抜刀は、優にボコブリン5体を吹っ飛ばし、後続の魔物たちをも一掃した。

その隙を逃さないといった様子で、レオンは一気に魔物たちへと距離を詰め、流れるように切り刻んでいく。

一体、二体、三体、四体……。

一匹も逃がさないといった様子で、レオンは素早く始末していった。

現代のシーカー族は、なにかと技術力の高さのみが注目されがちだ。しかし本来のシーカー族は、ハイリア人より遥かに機動力と躍動力に優れた、戦闘能力の高い民族で

ある。
ハイラル王国の影として秘密裏に暗躍し、忠誠をつくし。暗殺や諜報活動を生業とする、かつてのシーカー族。そんな本能とも呼べる種族の血が、レオンの身には色濃く宿っていた。
「グ、グゥ・・・」
目の前で起こる惨劇に、モリブリンは気圧されたように後ずさりをする。
暗闇に煌めく白髪、鋭い赤い眼光。そして額に描かれた〝瞳〟と〝涙〟の紋様。
軽々と大きな太刀を振り回すその男、レオンは、容赦なくモリブリンに迫り
「・・・　ふっ」
その首を刈り取った。
「ガッ・・・　!?」
刀を鞘に納めたと同時に、モリブリンは崩れ落ちる。
しかしその様子すら、もうレオンの目には映っていなかった。
目の前に転がるモリブリンたちの亡骸も、突如大地からせりあがってきた塔も、シーカー族の紋様が刻まれた喋る石も、彼の目にはもう何一つ映っていなかった。
「・・・・・　っ」
彼は焦ったようにカカリコ村に向かって走り出す。

彼の頭の中は、インパやパーヤといった、カカリコ村の民たちの心配ごとで埋め尽くされていたのだ。

「(無事でいてくれ…… !)」

普段感情表現を苦手とし、分かりやすく仲間たちの心配をすることがないレオンであるが、根本にあるその純粋な部分が、今の彼を激しく突き動かした。

元より彼は、誰よりも純粋で、誰よりも人の不幸を悲しみ、誰よりも人の幸せを喜べる人間だった。しかしいつからだろう。彼の純粋は、年を増すごとに曇っていった。

その原因の発端は、レオンの両親がカカリコ村を出ていった時にまで遡る。

カカリコ村にスパイとして潜入していたイーガ団の両親の元に生まれ、その両親がカカリコ村に伝わる〝秘宝〟を盗み出し、レオンを置いて村を出ていったあの日。

村の長老のインパに引き取られた当時の彼は、よく感情を表に出し、よく笑う純粋な幼子だった。

それ故に両親の悪事に普通以上の責任を感じ、彼はなんとかその盗まれた〝秘宝〟をイーガ団から取り返そうと、今日までの期間、ずっと暗躍の日々を過ごしてきた。

事あるごとにイーガ団関連の事件には首を突っ込み、その度にイーガ団の組員たちと対峙しては始末し、そのことが積もりに積もって、いつしか彼の純粋はどんどん曇っていくことになる。

やがて感情を表に出すことはなくなり、かつてあった純粋な瞳は鋭く光り、いつしか彼の笑顔を見ることも、稀となった。

それでも彼の根底に眠る純粋なその部分は、激しい揺れと轟音によるカカリコ村への被害を、酷く案じていた。

彼は村人たちへの心配を胸に、夢中でカカリコ村へ続く谷の道を駆ける。

木々が、動物たちが、魔物が、すべての景色が後ろへと過ぎ去っていく。

そしてようやく村が見えたというところ。

山に囲まれた道を出て、村にたどり着いたというところで、レオンは息を切らせながら立ち止まる。

「はぁ……　はぁ……」

膝に手を突き、息を整えながら村を見渡す。見たところ、幸い地震による土砂崩れなどの被害はない。

村人たちは、インパは、パーヤは。

不穏な心持で、彼はインパの屋敷に向かって再び走り出す。

しかし彼を待ち受けていた光景は、予想とは大きく違った村の光景だった。

一族の歴史

「おおレオン、帰ったか！」
村人たちの安否を祈って、切羽詰まった様子で村を駆け、屋敷に向かっていたレオンに、一人の男が明るい様子で話しかけてくる。
「帰ったけど‥‥」
「今日はめでたい日だぞ！」
インパの屋敷の門番、ボガード。
彼はレオンの思っていた村の様子とは真逆の出で立ちで、喜びに満ちた表情をしていた。
改めて村中を見回してみると、先に起こった揺れも、轟音も、カカリコ村には全く影響がないどころか、村人たちは歓喜の限りを尽くしている。
「‥‥‥‥‥」
そんな異様な様子に、レオンは面を食らったように立ち尽くす。
ここまで心配して駆けてきたのが、段々と馬鹿らしく思えてきた。
「ボガードさん」

「うん？どうした？こんなめでたい日にそんなに顔を青ざめて」
「いや、さっきの地震は・・・・」
「レオン、お前なあ。シーカータワーの出現といえば・・・・・・って、そういえばお前」
「・・・・・・・？」
シーカータワー。
聞き慣れないその言葉に、レオンは首をかしげる。
その様子を見たボガードは、呆れたようにため息をついた。
「いつもインパ様のお話を聞かずに寝てたもんなあ、レオンは」
知らないのも無理はない、とボガードは続ける。
１００年前より伝わるシーカー族の伝承。大厄災の最中に起こったその悲劇。四神獣とガーディアンの乗っ取りに、英傑たちの無念の死。
それらの伝承は、１００年前実際にその厄災を経験した長老のインパが、古くからこのカカリコ村に語り継いできた。
「えーっと・・・・？」
しかしこの男、レオンは、歴史や伝承なんてものには微塵も興味がなく。
幾度となく聞かされてきたはずのインパの伝承を、聞く度に眠りにこけ、一度その話の一小節が終わらんという頃には、毎度爆睡を決め込んでいた。

「・・・ ったく。とにかくインパ様のところで話を聞いてこい。今度は寝ないようにな」
そうボガードに後押しされ、レオンは歓喜する村人たちの間を縫い、インパの屋敷へと向かう。
深夜だというのにほとんどの村人たちが家の外に出て、突如出現した塔や、塔の出現とともに光りだした祠を眺めては、歓喜のあまりを尽くしている。
そんなカカリコ村の様子に、頭の中を?で埋めながら、レオンはインパの屋敷に到着した。
門から階段を見上げ、屋敷の方を見やると、インパとパーヤもまた、屋敷の玄関を出て、シーカータワーを眺めていた。
「・・・・ あ!お祖母様、レオン様がお帰りになられました」
「おや・・・・。やっと帰りおったか。今夜はどこに行ってたんだい、このドラ息子」
レオンの帰りを確認して、嬉しそうに微笑むパーヤと、呆れたように笑うインパ。
そんないつもどおりの二人の様子を見て、レオンは一息、安心したようにため息をつく。
「・・・・ 別に。ちょっとした散歩」
そして、無愛想にそっぽを向きながらそう答えた後、屋敷への階段を登る。
改めて二人を前にして、レオンは遠くに見える塔や、カカリコ村の祠を眺めた。

「レオン、あれが何か分かるかい？」
インパは、いつも伝承を聞かずに眠りにこけるレオンに、からかうように問いかける。
無論、一切の歴史の話を聞いてこなかったレオンに分かるはずもなく、彼は気まずそうにインパから目線をそらした。
「相変わらずよのお。先に突如出現した塔、あのモノの名前はシーカータワー。名前ぐらいは聞いたことあるじゃろう？」
「まあ、名前ぐらいは……　な」
全くの嘘である。
レオンにとってはシーカータワーという名前すらも、先程ボガードに聞いたのが初耳であり、まさに寝耳に水。塔も祠も、一切の詳細を知らないのだ。
「あれは正に希望の兆しじゃ。勇者が、〝リンク〟が、目覚めた証なのよ」
「ほーん……」
全くわからん。
説明を聞いてもなお、理解できない様子のレオンに、インパは呆れたようにため息をつく。
「パーヤ。このドラ息子にわかりやすく説明出来るかい？」
「は、はいっ。え、えーっとですね。１００年前に眠りについた勇者様が目覚めたことに

より、同時にシーカータワーや祠が目覚めたと思われましゅっ。……噛んじゃった」
「ほっほっほ。さすがパーヤじゃ。どこかの誰かさんとは大違いじゃのお」
「うるせぇ…」
１００年前の大厄災や、英傑のことについては、さすがのレオンも知っている。
これだけの説明をされれば、なんとなく全容を理解することができた。
１００年前。
神獣とガーディアンは厄災により乗っ取られ、四人の英傑は無念の死を遂げ。絶望的な状況の最中、一人の英傑、勇者リンクを回生の眠りにつかせたという。
今もなおハイラル城にて厄災を抑え続けているゼルダ姫の封印も、やがて解ける。
そんな絶望的な状況の今。厄災封印の要である勇者〝リンク〟が、１００年の回生の眠りから目を覚ましたのだ。
「……」
今一度、カカリコ村の住人たちを屋敷から見渡す。
彼らは一様にシーカータワーや祠を見上げ、その眼差しは一様に希望に満ち溢れている。
１００年前の悲劇。そして１００年間の硬直状態。今や何も知らぬハイリア人に対し、伝承が色濃く伝わるシーカー族は、この１００年の時を、いつ厄災が復活するかも

わからないという状態で過ごしてきた。
先の見えぬ不安。明日にはゼルダ姫の封印が解かれ、ハイラル全土が滅びてしまうかもしれないという焦燥感。それらが暗雲となり、深く暗くカカリコ村を包んでいた。
しかし今。１００年間の回生の時を経て、勇者〝リンク〟が蘇生を果たした今。もう彼らを包む不安は消え去った。
勇者と姫によって厄災は打破され、ハイラルを包む不穏な影は完全に消滅する。
そういった希望の光が、今のカカリコ村には差し込んでいたのだ。
「(そんな上手く行くかね・・・)」
まるでお伽噺のような話に、レオンは若干懐疑的であったが、正直、レオンにとって厄災復活についてはさして重要ではなかった。
彼にとって一番重要なこと、それは
「ってことはだ。厄災復活を目論むイーガ団が、勇者復活によって危機感を感じているってことだろ?」
「・・・・・　そういうことになるのう」
シーカータワーの出現に、祠の覚醒。
これほどまでに盛大に勇者復活を知らしめていれば、厄災復活を目論むイーガ団が危機感を感じるのもおかしい話ではない。今まで以上にその活動を活発にするはずだ。

レオンにとって最も重要なこと。
それは、イーガ団であり、生みの親である両親が、かつてこの村から盗み出したシーカー族の〝秘宝〟を取り戻すこと。
それ即ち、勇者復活によるイーガ団の活動の活性化は、レオンにとってはチャンスでもあった。
「婆さん、いい加減教えてくれ。俺の両親が盗んだ〝秘宝〟ってのは、なんなんだ？」
この期を利用して、イーガ団から秘宝を取り戻す。
それが今のレオンにとって最も重要なことだった。
「……」
「……」
レオンは、遠くはシーカータワーを見つめるインパの目を、まっすぐ見つめる。
カカリコ村から盗み出された〝秘宝〟。
レオンの生みの両親が盗み出した〝秘宝〟。
その実態を、育ての親であるインパは、今まで頑なにレオンに教えようとしなかった。
それは、レオンが親のしでかした罪に、深い責任を感じているのを知っているからだ。
ことあるごとにイーガ団関連の事件に首をつっこみ、危険をも顧みないレオンの姿を、ずっと見てきたからだ。

これ以上深いところまで、イーガ団とレオンを関わらせたくないという、〝親〟としての心配なのだ。
「……」
しかし、これ以上歯止めが聞くような男ではないということも、インパはしっかりと理解していた。
「は、はわわ……」
この緊迫した雰囲気に、パーヤが戸惑ったようにあたふたする。
パーヤには、この硬直状態が数時間にも及ぶように感じられた。
「……　はあ。言っても聞かぬのは、相変わらずよのお」
インパは、一つため息を吐いてから、屋敷の中へと入っていく。
レオンとパーヤは、二人顔を見合わせたあと、インパのあとに続いた。
「パーヤ、レオン。その屏風を裏返してご覧なさい」
インパが指差した先には、いつもインパが座っている座布団の後ろの屏風があった。
そこには、1万年以上前にあったとされる、大厄災を四神獣とガーディアン、姫と勇者で沈めた様子が描かれている。
「は、はいっ」
「……」

そんな屏風を、二人はインパの言われるがままに裏返す。
その大きな屏風は思った以上に重く、レオンとパーヤ二人がかりでも苦戦しながら、なんとか裏返すことができた。
そこには、表の1万年前の厄災の絵とは違う、また別の絵が描かれていた。
「これは……？」
まずレオンの目に飛び込んできたのは、そこかしこに描かれているシーカー族の紋様。
インパやパーヤ、もちろんレオンの額にも描かれているものと同じ。〝瞳〟と〝涙〟の紋様。
そして他にも、シーカー族と思われる人々の絵が所々に描かれているのがわかる。
「お祖母様、これは一体……」
パーヤが、屏風を見つめたまま呟いた。
「これは、我々シーカー族が代々築きあげてきた技術力の記録。屏風の右端を見てみなさい」
言われたとおり屏風の右側。隅に描かれているものに目を移すと、そこには今さっき現れたシーカータワーや、祠。ガーディアンや四神獣などの記述も見て取れる。
「1万年前、我々シーカー族が作り出した叡智の結晶。ガーディアンや四神獣。シー

カータワーや祠といったからくりたちは、長いハイラルの歴史の中ではつい最近の出来事に過ぎぬ」

「い、1万年前が、つい最近ですか……？」

「ほっほっほ。シーカー族というのは、遥か太古の時代。ハイリア人が存在するよりも以前、女神ハイリアの時代から存在したと言われておる。四神獣以前にも、たくさんの技術を作り出してきたのよ」

レオンは、屏風の一面に細かく描かれたその〝技術力の記録〟を眺める。

四神獣やガーディアンといった見慣れたものから、全く知らないものまで。今までシーカー族が作り上げてきた技術の記録がびっしりと描かれているのがわかる。

その中で一つ、レオンの目につくものが存在した。

「これ……」

屏風の左端。文字のかすれ具合や劣化から見るに、神獣やガーディアンなどが作られた1万年前よりも、遥か太古の時代に作られたと思われるもの。そこには、丸みを帯びた石のような絵が描かれていた。

その石にはシーカー族の紋様が刻まれており、詳細についても記述が残っているようだが、現代の文字とは大きく異なっていて読むことは叶わない。

屏風に描かれているこの石。微妙な形の差異はあれど、今日レオンが村に帰る途中で

見たものと同じもので間違いない。
シーカータワーが出現する直前。カカリコ橋のたもとで見つけた、あの喋る石に間違いはないだろう。
「おや、〝ゴシップストーン〟が気になるのかい？」
「ゴシップストーン？」
「シーカー族の持つ機密情報が記録された奇妙な石のことよ。かつてはハイラルの各地に点在していたらしいけれど、今や一つすら見つかっていないのじゃ」
まだシーカー族が諜報活動を生業としていた時代。彼らが集めた機密情報が記録された石こそ、ゴシップストーンなのだ。
かつてはハイラル各地に点在し、特殊な方法で情報を聞き出すことができたらしいが、今のハイラルにはその影一つすら見つかっていない。故にシーカー族の技術力は未だに不明な点が多い。のだが……
「……　いや」
「うん？どうした？」
「普通にあったけど……」
レオンの記憶が正しければ、カカリコ橋のたもとに、普通に佇んでいたはずだ。
「……」

「……」
「は、はわわ……」

「今、なんと?」
「いやだから、普通にあったって。ゴシップストーン」
「なんと!どこにあったのじゃ?それが本当なら大発見じゃ!」
　くわっと恐ろしい剣幕で、インパはレオンに迫る。
「か、カカリコ橋のたもとに……」
「そんな近くにじゃと!?これはいち早くプルアとロベリーに……　いやしかし……　ぶつぶつ」
　驚いたかと思えば、なにやら熟考にふけるインパを尻目に、レオンとパーヤは困ったように顔を見合わせる。
「ど、どうしましょう……」
「こうなったら長いよな……」

未だぶつぶつと熟考するインパを見て、レオンは大きくため息を吐く。

レオンにとって、世紀の大発見だろうがなんだろうがどうでもいい。早く盗まれた秘宝の詳細を教えてくれないかなー、と思いながら、パーヤと二人、屏風を眺めるのであった。